
ミッドナイトレイン。

はすこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッドナイトレイン。

【Nコード】

N2525D

【作者名】

はすこ

【あらすじ】

これは恋だから、何も望んじやないなんてウソだ。手を伸ばして、触れたい。――あなたの笑顔がみたい――あなたの「一番」になりたいよ

今年は見事なまでの空梅雨だ

今日も例外なく、朝からサンサンと太陽の光が降りそそぎ、日中はそりやもう真夏張りに暑かった

ところが、急に夕方頃からゴロゴロと空が鳴り、雲行きが怪しくな
って

あっという間に久々の大雨

世間は恵みの雨だ、ときっと喜んでいるだろうけど

「雨女だーれ」

「…敦くん、こっち見すぎ…あたし晴れ女だもん」

「うそだ、奏ちゃんが一番雨女っぽい」

「…どういう意味…それ…」

マスターの趣味でジャズが流れる店内は、私たち三人とカップルが
一組と、男二人組みだけだ。

平日ということもあるが、きっとこの雨のせいもあるだろう。

大体賑やかなこの店にしては珍しく静かだ

今日は昼のバイトの同期で馬があう三人で久々の飲み会を計画し、
遅刻間の敦さえもが時間きっちりに参加した

今日の会場は私の夜のバイト先のカフェバー「Dick Cafe」
待ち合わせた場所から、さてじゃあ移動しますかとなった瞬間にこ
の雨だ

待ち合わせ場所からDick Cafeまでは徒歩5分くらいの道だ
が、ギャーギャー言いながらその道を三人で走ってすっかりビシ濡
れになってしまった

「まあまあ、ほら二人ともグラスすすんでないぞー!!」

雨女問題でギャーギャーと論争するあたしと敦君をなだめて、真ん中に座っていたケイコが両隣のグラスをそれぞれに差し出す
あたしも敦君も、それを受け取って
そしてケイコも自分のグラスを手にとった

「はい、カンパーイ!!」

本日何度目かの乾杯

うちの飲み会のルール、乾杯したら即一気
そもそも、この三人が何かと仲が良いのは「飲める」という共通点
もかなり影響している

他の同期の子も何人かいるけれど、飲み会ときは皆が皆口を揃えて

「えー、お酒飲んだら顔赤くなるから嫌だー!!」

と、いまどきのオンナノコ独特の口調で言うんだけど

そんな子達を尻目に、乾杯ビールを三人同時に一気飲みしたことか
らこの仲良し三人組が生まれた

「あー、ビールがうめえ!!」

「せんせー、親父がいまーす」

敦君が、空になったグラスをコースターへ置きながら心底美味しそ
うに目を細める

そんな敦くんを茶化しながらチラリと横目で彼の横顔を見た
いつもそう

茶化したり、一緒に馬鹿やったり

「バイトのちょっと仲の良い同期」を演じながら

あたしは彼に恋している

いつもこうやって横顔を盗み見て、ただ今ここに一緒に居られるこ

とが幸せなんだ

「あ、ごめんー電話だ」

「お、ケイコおー男かぁ!？」

「違う違う、姉ちゃん姉ちゃん!!」

そう笑いながらケイコちゃんが店の外へとでていく
カウンターにはあたしと、敦が残った

「はー」

「ちよっと、二人になった瞬間にため息吐くなんて失礼なやつだね」
「違う違う!!」

そう。自分の顔の前で手をヒラヒラとふった彼の笑顔は
いつもと少しだけ違う気がして、胸がドキッとする
何て言うか、影がある

「何、何か疲れてんね」

「はは、最近眠れなくてさー」

明らかに苦笑を浮かべながら、敦くんはいつの間にか焼酎にかわっ
ているグラスを傾けた

カラン、完全にグラスの中の焼酎を飲みきると氷の音が響く

「市販の薬飲んでんだよ、今」

「あー、睡眠導入剤? あれあんまり良くないよ、癖になる」

彼の空いたグラスを手にとって、焼酎を造る

カラカラとマドラーを回しながら。もっと気の利いたことは言えな
いのかと心の中で突っ込みが聞こえた

「そうなんだよねー」

「…何か、悩みでもあるの？」

グラスと渡すと、敦君は「サンキュ」と呟いてそれを受け取る
そして同時に口に運ぶ

これ、言ってよかったんかな

確かにそこそこ仲良くはしてるけど、そんな相談とかするような間
じゃあない気もする

言っちゃったあとでモンモンと脳内で葛藤

私も、目の前の水割りと一気に口内へと流し込んだ

「彼女がさ、」

あーやっぱり

絶対そうだと思った

敦くんには付き合って2年になる彼女がいる

2年経っても倦怠期なんかまるでないみたいに年中ラブラブで

彼女がこれまた可愛くてよい子で、それこそあたしの取り入る隙な
んかない

自分の身分くらいわかってるわよ、これでも

だけど、一応一般的な恋する乙女とおんなじように

ダイスキな片思いの相手から、その彼女との話なんて聞きたくない
んです

だけど乙女心は複雑で、ちょっと込み入った話をしてくれると

「嫌われてはないのかな」って嬉しかったりもするんです

ジワジワと体にアルコールが染みるのを感じながら、あたしはグル
グルとそんなことを考える

どっちにしても、あたしは結局彼があんなふうになんて苦く笑うところを見ると胸が痛くてしょうがないので、
彼が話して少しは楽になるんだったら
彼の話を聞くといい選択肢しか残っていないんだけど

「うん、どうしたの？」

恋愛に関してばっかり無能なあたしは、出来る限りの優しい声でその首を傾げる

よっぽど言い辛いのかまた少し空白

そして、淳くんが口を開く

「彼女がさ、ずっと調子悪くてさ。微熱が続いてるんだよ。早めに病院行けって言ってるんだけど、なかなか行ってくれなくて」

やばい、

やばい種類の沈黙。

今度は私のグラスの氷がカラン、つと音をたてて崩れる。

「それは…辛い、ね」

胸がドキンッとする。

重ね重ね、もっと気のきいた台詞はでてこないものですが自分。

また胸がドキンッとする。

あたし今、すごく汚い事考えてる。

敦君の彼女が病気かもしれないとかの心配じゃなくて

そんな彼女を心配して、寝不足気味の敦君を心配するでもなくて

敦君に、これだけ思われてる彼女に
今更乍ものすごく嫉妬してる。
すごくすごく、羨ましい。

「ごめんごめん！！…って何しらけてんの！？」

沈黙を破るみたいに明るい声で、ケイコが席に戻ってきた。
途端、敦君がいつもの笑顔になる。

「おいおい、グラスあいてんぞー！！」

あたしのグラスに手を伸ばすとニツコリと笑って、氷を継ぎ足して
焼酎を作って
ホラ、とあたしに差し出した。

「はい、かんぱーい！！」

ケイコがそう言ってグラスを掲げる。
あたしも、敦君も自分のグラスを掲げて、空中でグラスを合わせた。

それからどれだけ時間がたっただろう。

お酒はガンガン進んで、すっかり盛り上がっているうちらを見かね
たマスターが

「あとは好きにして良いよ、閉じまりだけはよろしくね奏ちゃん」
と、店をでて

それでもまだくだらない話で盛り上がった。

二本目の焼酎のビンが空になりかけたころ、気が付いたらトイレ、と席をたったケイコがソファ―に寝転がり、規則正しい寝息を立てはじめて

時計をみたら二時ちょうど。

あたしと敦君は、バイト先にいる一つ年上の先輩2人が付き合っていると付き合っていないとかの話で盛り上がっていた。

すると、会話に割り込むように携帯から着信を知らせる音が響く。

「あ、やば。オヤジだ。ごめ、ちょっと電話してくる」

「大丈夫？」

「全然平気。いつものことだし」

苦笑しながら席をたって、店の外へでた。

外は相変わらず雨で

雨の日特有の匂いがゆっくりと鼻を掠める

電話の向こうの父親に、バイトの友達と飲んでいることを伝えて電話をきり

まだまだ沢山雨を含んでそうな真っ黒な空を見上げた。

「・・・そして2人とも寝てるしね」

店内へと戻ると、カウンターは無人で

いつのまにか敦君までソファ―で寝息を立てている。

もう一度時計を確認する。

洗物をして一通り片付けたら、起こしてタクシーに乗せよう

そう考えて、とりあえず飲み散らかしたカウンターの片付けにかか

った。

片付けをしたあと、ケイコを起こしてすぐ隣のタクシー乗り場まで送った。

ケイコは眠たそうではあったけれど、意外としっかりとした足取りでタクシーへ乗り込んだ。

そしてあとは

「おーい、いい加減おきろ！！ケイコちゃんはちゃんと起きて帰ったよ！！」

揺すっても、たたいても起きない

というか完全に無反応。

しょうがないやつ、大きく一つため息を吐いて冷蔵庫から冷たいお絞りを一本とりだして

気持ちよさそうに眠る淳くんの額にゆっくりとあてた

お絞りが額に触れた瞬間、ピクと大きな肩が小さく揺れる

いつもおどけたり、なんか可愛い行動が多いからそんなに意識しなかったけれど

サッカーをしてたというだけあって、意外とがっしりしてる

静かに、規則正しい寝息だけが響いていた部屋のなかにもう一つあたしの心臓の音が加わる

このまま唇でも奪ってやろうか、

本気でそんなことを考えた

でも、それを邪魔するように頭を過ぎったのは

さっきまで幸せそうに彼女のことを惚気ていたこいつの顔。

結局あたしのことなんて良くて友達、まあ無難なところで職場の同い年のやつ。

わかってるし、だから何も望んじやいない

今でもそれは変わらないし、彼女と淳くんのことを邪魔しようとも思わない

あたしはよいの、彼にも気づかれず

ただひっそりとあなたの行動に一喜一憂したいだけ

それもあなたが学校卒業して、バイトを辞める今年いっぱいの期限付き。

それだけ

それだけなのに、すごく苦しい

目の前に好きな人がいるのに、

手を伸ばせば届く距離なのに

これは恋だから

何も望んじやないなんてウソだ

手を伸ばして、触れたい

あなたの笑顔がみたい

あなたの「一番」になりたいよ

切ない、切ない

ポロポロと、泪が頬を伝う感触

こんなことで泣くななんて、あたし馬鹿だ

今だけ、神様今だけで良いから

気がついたら、あたしは小さく寝息に合わせて揺れる淳くんの胸に
頭をおいて

ドク、ドク

彼の心臓の音が聞こえる

その音と、彼のぬくもりがやけに心地よくて

そのとき、少しだけ彼の胸が大きく揺れて

次の瞬間、淳くんの大きな手があたしの頭を優しく撫ぜた

「どうしたの？」

その声がとっても優しくて、

その手がとっても暖かくて

胸がギュッてなる

彼女と勘違いしてるのかもしれない

それでもよいからしばらくこのままであんなにかかった

神様、ごめんなさい

淳君の彼女ごめんなさい

今だけ、今だけ許してよ

大分長いような

でもすごく短いようなそんなひと時だった

淳くんはまた規則正しい寝息をたてて

あたしは大分落ち着いていた

多分、もうそろそろタイムリミット

3時が過ぎた

彼女のところに帰さなくちゃ

帰さない、理由はきつと無かった

「淳いいい！！いい加減起きなさいってば！！！！」

顔をあげて、涙を拭って

淳くんの耳元でそう叫ぶと、思い切り彼の肩を揺すった

「うー」

淳くんが小さく呻く

そして、意外と素直にその目が開かれた

「お、起きたじゃん！！ほら、帰るよ！！彼女が泣くよー！！」

「…いやだーねむい」

「ばーか！！ほら、おきんか！！」

無理やり、ソファァーから引き剥がすように肩を抱き起こす
淳くんはゆっくりと状態だけ起こすと、そのままソファァーの背もたれに背中を沈めた

「そのまま気合で起きろーもう3時過ぎてんだよー!!」

「…奏ちゃんが泣いてる夢みた」

「え…」

アルコールのせいで、座った淳くんの目がまっすぐあたしを見る

「どうしたの？」

さっきと一緒

やさしい声

でもあたしはその優しさに甘えちゃいけない、
期待しちゃいけない

反射的に目をそらして
笑った

真正面の地べたにすわっていたあたしは、立ち上がって淳君の横に
腰掛ける

「夢だよ、夢!! この酔っ払いが!!」

そして一発、勢い良く頭にパンチを食らわした

そう、これで良い

自分に言い聞かせる

淳くんは大げさにさっき寝ていたほうとは反対のほうへと倒れこんだ
ドサ、と小さく音がして体が揺れる

「あー、もうコラ!! おきなさいってば!! もう帰らないと彼女に
怒られるよ!!」

「んー…彼女って誰ー?」

「しばらくぞ…ほら、起きんか!! 帰るよ!!」

さっきと同じように、彼の身体をソファーからはがす
さっきと違ったのは。起き上がった淳くんの広い胸があたしの視界
を奪ったこと

抱きしめられてんだ、

そう理解するのに少し時間がかかった

ドキンドキン、ドキ

大きく心臓になる

「おい、甘えんなこの野郎。あたしは彼女じゃないよ!!」

極力平静を保つふりで、いつもの口調で手を伸ばして軽く頭を小突く

「奏ちゃん、泣いてたでしょ?」

「…泣いてない泣いてない、良いから帰るよ、酔っ払いが!!」

しばらく沈黙があつて、淳くんはゆっくり腕を解いた
そして、あたしの肩にトン、と頭が置かれる

「もうちよつとだけ」

小さく、淳くんがつぶやいた

ドキドキと、一緒に

幸せでいっぱいになる

ダメだってわかつていながら、どうしようもなく幸せになる

アルコールで温まった肌が触れ合つて暑い

「あと、二分だけね」

やつのことでそう呟いて、肩にもたれる淳君の頭に、自分の頭を
重ねた

淳くんが

「うん」

と小さく返す

あと二分だけ

チラと時計を見る

アルコールでぼやけた視界で小さく針がすすむ
このまま止まっちゃえば良いのに

時計はうらめしいくらいサッサと進んだ
あたしは、きっかり二分たったあとひとつ大きく息を吸った

「はい、にふーん！！！！あんたは愛しい彼女んところにかえんなさいー
い！！！」

スクッと立ち上がって、キッチンスペースへと進む
グラスに氷をはって、ミネラルウォーターを注ぐ

アルコールと、みようにはやく打つ心臓のせいで手元がかなり怪しい
チラリと目をやると、淳君は寝ぼけた顔で「んー」と背伸びしている

人の気も知らないで良い気なもんだよ、この人は

自然にため息がでる
グラスをもって、彼のそばへと近づいた

「ほい、水」
「サンキュ」

少し酔いが覚めたのだろう、さっきよりしっかりとした口調でそう
言う、グラスを受け取って喉を鳴らして水を飲んだ

「タクシー乗り場までおくるからもうタクシーで帰んなさいよ」
「あー、俺バイクで帰るつもりだったのに」
「馬鹿言うな…」

まだ少し語尾に酔いが残っている

私は苦笑しながら淳くんから空になったグラスを受け取った

淳くんは、もう一回大きく背伸びするとゆっくりと立ち上がった

足元はやっぱりどこか覚束無い

自然と支えるように淳くんの腰に手を回した

「階段、すべるから気をつけて」

「つかなんて奏ちゃん酔っ払ってないの…」

「酔ってますよ、ただあたしまで潰れたら皆で仲良く此処で朝を迎えることになると思って」

「ごめんね」

「良いよ、楽しかった」

ゆっくりと階段を上る

どうやら雨は止んだらしい

「雨、止んだね」

「ほんとだ」

外はとても静かで、さっきケイコちゃんを送ったときよりもタクシーの台数もずっと少ない

タクシーに乗る前に、淳君はもう一度ほんとにごめんと誤った

「ちゃんと家まで帰るんだよ、ドアの前で寝んなね」

「大丈夫大丈夫。じゃあ、おやすみ」

「うん、またね」

雨がこのまま止まなければ良かったのに

敦君がのったタクシーを目で追いながら
何故かポツンとそんなことを思った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2525d/>

ミッドナイトレイン。

2010年10月11日01時54分発行